

陽介 N

【都会のアスファルトはシヨっぱい。それは夢が途絶えた若者たちの涙が沁み込んでるからだ】なんてどこかのアーティストが言ってたかどうかは知らないけれど、大概の人の願いは叶わない。必ずしも努力は報われるわけじゃない。いつか武道館のステージでコンサート！そう夢を抱いてた音楽仲間も、今じゃ大半は活動すらしてない。たく根性ねえやつらばっかだ、俺ひとりで絶対夢を掴み取ってやるからな！……そう思い続けるのも、どうやら限界があるようだ。

電話の音。電話に出る陽介、相手がコウタだとわかってるよ
うだ。

● 田舎・駅前

陽 介

もしもしコウタ？

コウタ

びびったよ、まさか陽介とは。知らない番号の着信だったから。

陽 介

ごめんごめん。俺番号変えちゃったからな。あ、一応留守電にはメッ

セージ入れたんだけどさ。

コウタ 聞いた聞いた、こっち戻ってきたんだって？ 何、もう親父さんと

こ？

陽介 や、今駅着いたところで、実家はこれから。

コウタ 何？ 仕事で？

陽介 そそ、ツアーの途中でさ。

コウタ ツアーってソロ活動の？

陽介 ま、そうね、一応全国ツアーで。

コウタ すげえな！ 全国ツアーって。

陽介 そんな大したもんじゃないよ。

コウタ ちょ、詳しく話聞かせてよ、え、いつまでこっちに居れるの？

陽介 んー、ま、明日の朝には東京戻らなきゃいけないんだけど。

コウタ 明日の朝!? 光の速さじゃん!? 忙しいなあ。えーちよつとでもうちの店寄れるタイミングあったら来てよ、暇だからさ。

陽介 あー聞いた、実家継いだらしいな。

コウタ まあ、なんか親の遺言的に、店を売りに出したいくないみたいな流れになっちゃってさ。

陽 介

ちよつとタイミングみて、どつかで顔出すよ。

コウタ

オツケー、そんな時に聞かせてくれよ、ツアーの話とか。じゃあな。

陽介N

今回の帰省は、ツアーのついでなんかじゃない。そもそも今はツアーなんてできる境遇じゃない。もう新曲なんて何年も作ってない、浮かんでもこない。たまの音楽活動といえば、知り合いのアマチュアバンドのサポート程度で、普段は知り合いの会社の事務を手伝い、その金をパチンコにつき込む日々、それにより博打的な人生を博打で制す！という予定だったが、あくまでそれは予定でむしろ損失のほうが多い。結果、昔世話になってたバンドの先輩への借金が膨らみ、一人で暮らす親父を頼って、田舎へ戻ってきた。端的に言えば、そういうわけだ。

小百合

よー……すけ？

陽 介

(声の方を見て) ……小百合……。

小百合

え、嘘!? なんてヨースケが!? なんて? なんてヨースケなの?

陽 介

なんで陽介なの? って言われても。

小百合 やだあ、こっち戻ってきてるなら連絡してよ。

陽介 今戻ってきたばっかだから。

小百合 え、びっくり。コウちゃん聞いたら絶対ビビるよ。

陽介 あ、さつきコウタとも電話でしゃべってた。

小百合 え、ほんと!? じゃあさ、じゃあさコウちゃんの店行こうよ、どうせ

暇してるからさ。

陽介 N

地元の駅前で偶然出くわした同じ年の女性は、昔組んでたバンドのボーカルだった。俺が曲を書き、彼女が歌い上げる。そんな絵に描いたような青春を共有した仲間だ。あの頃は公私ともに超至近距離な関係だったが、久しぶりの再会は距離感の取り方が難しい。驚きと嬉しさといとしさと切なさとその他色々な感情のバランスをとりながら、もう一人のバンド仲間、コウタのところへ向かった。

カランコロンカラン（レトロな喫茶店のドアの鈴音）。

● コウタの実家（喫茶店）

コウタ

いらっしやいませ……（入ってきたのが小百合だと気付き）なんだ、小百合か……（その背後に陽介がいるのに気付き）え、あれ、なんで陽介？　なんで陽介なの！

陽介

なんで陽介なのって言われても、さっき電話で話したろ。

小百合

偶然、駅前で逢ってさ、とりあえず、ハイボールと生、ある？

コウタ

とりあえずでハイボールと生は出ないよ、うち喫茶店だぞ。

小百合

喫茶店だってお酒ぐらいあるでしょう。せっかく久々に三人揃ったんだよ、お祝いお祝い。

コウタ

ったくもう。（と一旦退場したようだ）

小百合

いや〜びつくらこいた。え、2年ぶり、だよね？　にしてもヨースケ、全然変わらないね、

陽介

小百合だつて変わらないんだろ。

小百合

いやいや、私はもうババアだよ、田舎に引つ込んだ妖怪ひっこみババア。ヨースケみたいに未だ都会でバリバリ活動続けてる人間とは違ふよ、ほんと尊敬する。え、なんでいきなり戻ってきたの？　忙しいん

じゃないの？

コウタ ツアー中だとき。(と、お酒を持ちながら)

小百合 ツアー中!!

コウタ ごめん、生ぬるい瓶ビールしかなかった。

小百合 え、なんで生ぬるいの、最高だよ、生ぬるビール。(陽介に) え、ツ

アーって全国ツアーってこと!?

陽介 ま、一応。(あ、コウタに)

小百合 あ、コウちゃんも、はいコップ(渡して、ビールを注いであげつつ、

陽介に) うわー、どんだけ上昇気流なの!? どんだけ飛ぶ鳥を射落としまくるの？

陽介 そうでもないって。

コウタ ほら、とりあえずグラス持って。先に乾杯だろ？

小百合 (ついでもらいつつ) そうだね、募る話は乾杯の後で。はい、みんなグラス掲げて。じゃ、えーっと。何に乾杯？

コウタ ひさしぶりの再会に、でいいんじゃないの？

小百合 そうか！ さすがコウちゃん。じゃあ、えーっと、(改まって) ヨー

ステおかえりなさい、そして久々のスリーピース再集結に、

三人

かんぱーい！

陽介 N

三人で乾杯をするのは、確か単独ライブで千人動員記録した打ち上げ以来だ。あのライブの後、インディーズの登竜門であるフェスに声がかかった。夢は必ず叶う、そう信じて疑わなかった頃の話だ。あれから俺たちは年を重ねた。だけど長い時間を共有した仲間との会話は、まるでタイムマシンだ。容易くその当時に戻れる。酒が入ればなおさらだ。とにかく飲んだ。飲んで食べて大いに盛り上がった、居酒屋でもないのに。

小百合

そうだ、コウちゃん、この店、ギター置いてなかったっけ？

コウタ

とつくに処分しちゃったよ。

小百合

ええええええ。もうう。

コウタ

何に使うつもりよ？

小百合

決まってるでしょ、久しぶりに再会したんだからさ、一緒に歌おうと

思っ。陽介に弾いてもらってさ。

コウタ

ここ歌広じゃねえってば。

小百合

じゃアカペラでいくかな!? じゃ二人はエアーで、あ、ハモってもいいよ。

コウタ

だからいいってやらなくて!

陽介 N

小百合が先陣をきり、俺がそれに乗っかり、突っ走りすぎる俺たちをコウタが止めに入る。昔からのパターンだ。コウタは体裁を気にしていたが、周りのお客がゼロだったその店内じゃ俺たちを止めるものは何一つなかった。久しぶりの小百合の歌声を間近で聴いた。やっぱりこいつは好きだ、元彼女を好きっていうと語弊があるかもしれないけど、男とか女とかそういうの超越してやっぱり好きだ。この瞬間がずっと続けばいいのに。あの頃もきつとそう思ってたんだ。……やがて立て続けに何曲も歌った小百合は、やりきった様子で椅子に腰を下ろした。顔色はほぼ変わってないが、本人いわくかなり酔ったようだ。

照明変わって。

小百合

さてと、そろそろ家戻ろっかな。あんまり遅いと怒られちゃうし。

陽 介 怒られる？ 誰に？

小百合 旦那、やきもち焼きだからさ。

陽 介 え、旦那？ え!?

小百合 え、って何よ。

陽 介 お前、結婚してんの？

小百合 こうみえて、人妻でござんす。

陽 介 嘘でしょ？ いつ結婚したの？

小百合 去年去年。

陽 介 新婚さんじゃん！ 新婚さんいらっしやい出れるじゃん！ え、相手、

どんな人？

小百合 いいよ、もう。私の話なんて別に面白味ないから。

陽 介 いやいや気になるよ。え、コウタも知ってる人？

コウタ えっと、まー。

陽 介 ちよ、ちよ、ちよ、教えてよお。

小百合 いいってば、もう。幸せな新婚生活を邪魔しないで。

陽 介 いや、別に幸せを邪魔するつもりないけど。

小百合 じゃいいでしょ、もうその話おわり！ またね。(と、ふらつく)

陽介 (支えて) おい、大丈夫かよ。ふらついてんじゃん。

小百合 大丈夫大丈夫。コウちゃん、またね。

陽介 (コウタに) ちよつと小百合そこまで見送るわ。

コウタ おう。

カランコロンカラン。(陽介と小百合、外へ)

●外

コウタの照明がやや暗くなり、

陽介と小百合のみ。

田舎の夜、鈴虫の声とか。

陽介 おい、しつかり歩けつてば。

小百合 いいよ見送らなくて、コウちゃんそこ戻りなよ。一人で歩けるつて。

陽介 いや、酔拳みたいになつてるよ、いいよ、タクシー捕まえるから。

小百合

タクシーって……ここらへんじゃタクシー来るわけないって、車自体が滅多に通らないんだから。

陽介

あ……そうか。

小百合

やだねえ、もうすっかり都会の感覚になっちゃって、ヨースケは。

陽介

そういうわけじゃないけど。

小百合

ここじゃあさ、都会にあつたはずのものが何にもないんだよ、なーんにも。あ、星は綺麗だけどね、それ以外はなーんにもない。……あ、

ほんと大丈夫、歩ける距離だし。……ヨースケ、今日はありがとね。

陽介

なんだよ、改まって。

小百合

久々に笑った気がする。

陽介

久々に笑ったってなんだよ、お前、幸せな新婚生活だって、さつき。

小百合

それとは別。

陽介

なんだそりゃ、よくわかんないけど。

小百合

陽介、目閉じて。

陽介

え、何？ こわいよ。なんか。昔お前に、目閉じてって言われてピツタビタの靴下、頭の上に。

小百合

(目を閉じて、陽介に近づく)

陽介
!?

鈴虫の音が止まる。

陽介、手に持っていた本を思わず落としてしまう。

陽介N
触れた唇の感覚。草むらの虫たちが一齐に鳴くのをやめ、俺たちを見ていた。ような気がした。

小百合
じゃあね、おやすみ。

小百合の照明が消えて、陽介のスポットのみ。

陽介N
それから小百合はくるりと背を向け、電灯もない闇の中に消えていった。なんだったんだ、さっきの行動は？　なんで……わからない。ただひとつだけはっきりしていたのは、唇を重ねた時の懐かしい香り。その昔、ずっと隣にいた頃、当たり前のようにそこに存在した小百合の匂いだ。

カランコロンカラン。

● コウタの喫茶店

コウタの店に、陽介が戻ってきたようだ。

(コウタにも照明がつく)

コウタ 随分見送りに時間かかってたなあ。そこらへんであいつゲロとか吐いてた？

陽介 いや、まあ、そんなところ。一応一人で帰ってたけど。あんな飲みかたするやつだったっけ？

コウタ 嬉しかったんじゃない？

陽介 何が？

コウタ 久しぶりに会えて、陽介に。

陽介 ……。にしても全然想像つかないわあ、小百合が人妻だなんて。

コウタ 想像つかないたって、やっぱり田舎は結婚早いよ。戻ってきて改めて

気づかされたけど、うちの同級生ほぼ既婚者だよ。

陽介 そっかあ。みんなそれぞれ幸せ掴んでんだな。

コウタ あいつは幸せじゃないと思うけどね。

陽介 ……あいつって小百合のことか？……どういことだよ。

コウタ 夫の暴力やばいらしいし。

陽介 ……暴力って……DVとかってやつ？

コウタ ま、そんなところ。だから今離婚調停中なんだって。

陽介 マジで？ 嘘だろ？

コウタ 嘘言っでどうすんだよ、あいつの顔のアザ、気づかなかったのか？

あれ旦那にやられたんだよ。

陽介 え……じゃなんで幸せな新生活みたいな言い方したんだよ。

コウタ 陽介に言えるわけないだろ。

陽介 は？ どういことだよ。

コウタ 昔付き合ってたやつ目の前にしてさ、自分は毎日毎日酒乱の旦那に殴

られたり蹴られたりしながら何とか生きています、なんて言えると思
うかよ。

陽介 お前は、前から知ってたの、あいつがそんな状況だったって？

コウタ 知ってたつていうか、血だらけで一回この店にも逃げ込んできたしき。

陽介 知ってるならなんとかしてやれよ！……あいつ、なんでそんな奴と結婚したんだよ。

コウタ ……まあ色々あったんだよ、あいつなりに。こっちに戻ってきたって働き口も限られてるしき、あいつん家も大変な時だったし。

陽介 色々が何かわかんねえけどさ、何やってんだよお前。コウタ力貸してやらなきゃダメだろ！ 一番身近にいるのお前だろ！ おい、聞いてんのか！

コウタ ……昔っから変わんないな、そういうとこ。

陽介 は？ どういうことだよ。

コウタ 人にあれこれ言うくらいなら、自分がなんとかしてやりゃよかったろ。俺はやってたよ、あいつを喜ばせるためにずっと曲を。

コウタ 結局、肝心な時にできなくなつたろ！ それで全部ダメになつたんだよ！

陽介 何だよ、その言い草、解散したのも俺のせいだつていうのか？

コウタ ……もういいけどさ、終わっちゃったことだし。

陽介 よかねえよ、なんだ、その言い方！ 解散するつて言い出したのコウ

タだろう！ 俺はやめるつもりなんかなかったんだよ！ だから今でも一人でやってんだろうが！ お前らが勝手にやる気なくしたから、俺だけ。

コウタ もういいよ、強がるのは。ツアーの途中ってのも嘘でしょ。

陽介 !? は？ 何言ってるの？

コウタ 田舎にいるからって何にも知らないとも思った？ やめなよ、そういうみっともない嘘。

陽介 やめろ、コウタ。

コウタ そもそもなんで俺に電話してきたの？ 自分より早く都落ちしたやつに会って安心でもしたかったの？ 自分よりダメなやつを見てさ。

陽介 おい、それ以上言うマジでキレルぞ。

コウタ 俺たちがそれなりなとこまでいけたのは小百合がいたからだよ。陽介 一人で何もできるわけないじゃん、何が小百合のためだよ、あいつのことほんとに想ってたなら、なんで肝心なところで。

陽介 黙れ！（突き飛ばすマイム）

ボタン、カランコロン。

陽介 N

酔っていたとはいえ大人げない口論をしてしまった。そんな罪悪感に苛まれながら実家へと戻った。お袋が死んでから人としやべる事自体久しぶりな独居老人の父は、しわくちやの笑顔で出迎えてくれた。食べきれないほどのデリバリー寿司とピザのもてなしを受けながら、嘘八百のよもやま話、武勇伝を並べ、孝行息子を演じ、金を借りる事もすんなり成功した。今も俺を信じて疑わないオヤジ。だからこそ余計に心苦しかった。

電話の音。

陽 介

（電話で。やたら固い表情で）もしもし佐伯先輩、お世話になってます、あ、今、実家戻ってまして、ええ、さきほど親から拝借したんで、来週にはきっちり返済できるんで。はい、じゃ失礼します。

電話を切る。

陽介 N

我ながらクズだ……。時計の針が止まったままの自宅部屋の中で思わ

ずそうつぶやいた。当時好きだったアーティストのCD。コピーした楽譜。バンド時代にもらったトロフィーや賞状、当時の写真、その頃の思い出がいやがおうにもそこにはあつて、そしてその全てが埃をかぶっていた。

陽介

……なんで俺たちは離ればなれになっちゃったんだっけ……。

陽介N

押入れからひっぱり出した冷たいフトンに入ったその夜、昔の夢を見た。バンドを始めようとしてた頃の夢だ。

コウタ

なあ、陽介、ロックって興味あるか？

陽介N

高2の夏、休み時間に突然そう切り出してきたコウタに対し、バカにすんな知ってるに決まってるんだろ、とみぞおちを食らわしたが、正直なところロックの口の字も知らなかった。

コウタ

興味あるならさ、文化祭でロックバンドやろうよ、そしたら絶対、モ

テるって。

陽介 N

モテると聞いて、その日のうちにギターを買い、時を同じくしてコウタもギターを買っていた、お互い親にねだって。その時まで、ボーカルという存在が必要だということも知らなかった。

小百合

ねえ、じゃ私、歌っていいかな？

陽介 N

マイクを握った小百合の姿を初めて見た日の事を今でも覚えてる。クラスメイト数名でカラオケに行った時だ。歌声を発すと同時にソファの上で激しく飛び跳ね、縦横無尽に動きまわり、ドリンクを運びにきた店員にハイキックを食らわした彼女の姿に、俺たちはまだ知らぬ口ツクというものを感じた。

コウタ

(かなり緊張気味) あ、あの、お、おれたちバンド組んでさ、ただ、あのー、二人だけだと、心細いっていうかなんていうか。

陽介

(同じく緊張気味) お、俺は君のために曲を作る！ だから君は俺の

ために歌ってくれ！

小百合

え……。

陽介N

その時なんでそんなことをあいつに言ってしまったのか自分でもよくわかんなかったけど、今思えば自分なりの告白だったんだらう、それから小百合のオッケーをもらい即席で組んだスリーピースバンドは、文化祭での客席ダイブパフォーマンスかつこ複雑骨折から始まり、土日には路上でのライブ、あるいは古びたライブハウスでの活動へと繋がった。

コウタ

みんな、今日は盛り上がっていきましょいいいいいい！！

陽介N

とコウタが語りかけた最初のライブの客は、あいつの身内と、俺のおばあちゃんだけだった。

小百合

今日来てくれた全ての人に私たちの精一杯を届けます、どうか最後まで聴いてってください。

陽介 N

そうやって、ひとたび小百合が歌いだすとその場の空気は動いた。ふらっと顔をのぞかせたお客も前のめりになりリズムをとりはじめ、おばあちゃんは小刻みに震えだした。次、また次とライブを重ねるたび増えていくお客。俺も新曲を作り続け、小百合に見せ、推敲を重ねる、それを共有する時間がただ楽しかった。ただ、ただ楽しい。最初はそれだけだった。

コウタ

なあ、卒業したらさ、うちら東京出るってのはどうかな？

陽介 N

高校三年の冬、学生生活最後のライブ終わりに切り出したコウタのその言葉に、俺と小百合は食い気味でオツケーした。さらなる高みを目指すのの上京、夢は武道館で単独ライブ！ いつのまにか俺たちはそんなベタな夢を抱くようになっていた。実際東京に出てからは、想像以上のライバルの多さに面食らった。同じように夢を抱く輩がいっぱいいて、いっぱい才能が溢れていて、ライブハウスもいっぱいあって、おまけに生活もいっぱいいい。それでも立ち止まったら巨大な渦に埋もれそうで、風呂なしトイレなしオバケありの安アパートで曲

を生み出し、ライブをやりつづけ、そしてその隣にはいつも小百合がいた。小百合と正式に付き合いだしたのも至って自然のなりゆきだった。東京での活動も徐々に広がりを見せ、ハコも次第に大きくなっていった。若手インディーズバンドの登竜門と言われるフェスにしないか？ と声がかかったのは上京していつのまにか9年が経っていた。

小百合

え！ ほんとにうちら参加できるの！

コウタ

このフェスで発表する新曲が、先方の事務所に気に入ってもらえたらメジャー契約もしてくれるって、色々偉い人連れて来てくれるみたいだし。

小百合

え、すごい！ ついに運が回ってきたよ、ね、陽介。

陽介N

長年ただの憧れだったものが急に現実味を帯びた。メジャーデビュー契約、その響きだけで何だか高揚していた。

コウタ

だから今度の曲、今までで最高の曲頼むよ、陽介。

小百合

大丈夫、ヨースケならできるよ、ね……。

陽介 N だけど……新曲はできなかつた……。

コウタ は？　なんでまだ出来てないの？　フェスまでもう時間がないって。

小百合 どっか具合でも悪いの？

陽介 いや、そうじゃないんだけど……色々考えちゃって。

小百合 いつも通りで大丈夫だよ。

コウタ 頼むよ、期待されてんだからさ、このチャンス逃すわけにはいかないって。

陽介 N コウタの言う事はもつともだ。俺は余計なことを考えすぎてたのかもしれない。

急に視界が広がって怖気付いただけなのかもしれない。それまでは、ただただ小百合が喜ぶのが見たくて曲を作ってた気がする、だけどこの先はそんなシンプルだけでは済まない。業界の色んな大人たちの手が加わって、色んな意見を取り入れて、顔も知らない不特定多数の人間に自分の曲を届ける。そんなことを本当に自分ができるのか。色々考えれば考えるほど何も生み出せなくなっていた。それから俺たちの中は、ぎこちない空気が混じりだした。

コウタ

もう、やめよっか。

陽介 N

結局そのフェスティバル参加もドタキャンし、それからのライブも立って続けにキャンセルになった事で、コウタがそう切り出し、あっさりとバンドは解散した。小百合はただ黙っていたが、その後トイレに籠って声を殺し大泣きしていた、らしい。俺はしばらく誰とも話したくなかった。携帯も解約した。小百合との関係も曖昧なままフェイドアウトした。完全に音楽とも離れようと思った。だけど往生際が悪くて、不完全燃焼の俺だけがいまだ業界にしがみついている……。

朝っぼい光に変わる。

コケコッコ〜などと鶏が鳴いている。

まどろみから覚めたようだ。

陽介

……もしあの時、曲ができてたら、俺たちはどうなってたかな……。

小百合の電話が鳴る。小百合の照明も明るく。

小百合　もしもし。

陽介　あ、ごめん、まだ寝てたか？

小百合　起きてたけど何どうしたの、こんな朝から？

陽介　いや、どうって昨日べろんべろんだったから、大丈夫だったかなと思
って。

小百合　ちよつと二日酔いだけど、大丈夫。今日、東京戻るんだよね？

陽介　まあね。

小百合　そっか……気をつけてね。

陽介　……。あ、もしあれだったら、戻る前に、もう一回どっかで会う？

小百合　え……。いいの？　じゃそつちまで迎えに行くよ、アシないでしょ？

小百合の照明、少し暗くなり。

陽介N　俺は本当にどすけべな男だ。いいの？　と小百合に言われて、昨夜の

別れ際に重ねた唇が頭によぎった。もう一度会ってあのキスの続き
を！　そんなすけべな妄想をする自分の下半身は、自分の意を超える
ほどカッチカチになっていた。いや待て、それが目的なんかじゃない。

小百合に連絡したのは、あいつを暴力夫の手から救い出したい、それが主旨だ。いや本当だ。

小百合

もっかいやり直してくれるの？

陽介 N

救い出すのはよしとしよう。けどその先もしそう言われたら……俺は、あいつとやり直せるんだろうか。やり直すって何を？ バンド？ それとも俺たちの関係？ そしたら今度こそうまくやれるかな……小百合の車を待つ間、いろんな妄想が脳内で浮かんでは消えた。

ファファと車のクラクション。

小百合

ヨースケ！（と遠くから声かけ）

陽介 N

迎えに来てくれた小百合の助手席に座り、車は走りだす。車内にはほんのりタバコの臭いがする。旦那のだろうか、それとも小百合が吸うようになったのか。いやそんなことはさほど気にならない、むしろ気になるのは、駅へ向かう途中の国道沿いのラブホテルたちだ。趣向を

凝らし点在する大小さまざまなラブホ群が、今日はやたら【おいでおいで】してるような気がして仕方がなかった。

車のエンジン音が止まる。

小百合

はい、到着つと。

陽介 N

駅に着いちゃいました。何ごともなく着いちゃいました。いや、そうですねよ、それでいいんですとも、何をエッチな妄想してるんだ、俺は。時刻表を確認してから二人でベンチに座った。次の電車がくるまであと一時間……。それでお別れだ。

小百合

またこっち寄ったら連絡してよ。

陽介

そうする……。

ぎこちない二人の上空を、とんびの声。

陽介 ……あ、そういや、昨日、家戻ってから旦那に何か言われた？

小百合 え、何かって？

陽介 だって、旦那嫉妬深いって言ってたから、帰り遅いとか。

小百合 あー、大丈夫だよ、別に。

陽介 ほんとか？

小百合 ほんとだよ、なんでそんな探り入れる言い方すんのよ。

陽介 いや、ま、なんか、ちよつと変な事聞いたからさ。

小百合 変な事って何？

陽介 お前のそのアザ、旦那にやられたんじゃないかねえの？

小百合 ……。はは。何言ってるの、ちよつと転んだだけだよ。

陽介 ……本当か？

小百合 だからああ、やめてつてばその言い方。ほんとに転んだだけだって。

コウタ 隠さなくたっていいよ、小百合。

小百合と陽介が声のほうを向く。

小百合

コウタ……。

陽介 ……。

コウタ 俺が全部話した。

小百合 ……。

コウタ 陽介、昨日言いすぎたごめん。調子に乗って飲みすぎたのもあって。

陽介 いや、こっちこそ。

コウタ 小百合が正式に今の旦那と別れられたら、俺、小百合と付き合おうと思ってる。

陽介 ……え!?

コウタ 小百合が正式に今の旦那と別れられたら、俺、

陽介 (遮って) 二度言わなくていいけど、え!?! え!?!

コウタ 陽介も言ってたろ、お前が一番身近にいるんだから守ってやれって。

陽介 ままま、まあ、そうだけど、あ、そうだったんだ、なんだよ、昨日言

えよ、そんな大事な事。

コウタ 言おうと思ったら、ほら、なんか、その前に感情的になっちゃったからさ。

陽介 そっか……。あ、そうだ! じゃこれ、とつとけよ。(と何かを渡す)

コウタ え？（中身を見て）何、この金。

陽介 何ってお前、先立つものがあるだろ、ご祝儀だ。

コウタ いやいや、ご祝儀って額多すぎるだろ。だいたいまだ結婚すらしてないのに。

陽介 大丈夫だよ、こんなの全然大した額じゃないから、昨日殴っちゃった慰謝料込み込みみってことで。

コウタ ほんとに、いいの？

陽介 いいってば。もらえるものはもらっとけ。お前、昔っから金ない金ないって喚いてたし、親の後もついじゃったわけだし、店もキリキリまいたろ？

コウタ 親の遺産、1億あった。

陽介 そんなにあったの!?

コウタ ひいじいちゃんの土地売ったらしくて。

陽介 あ、そうなんだ……。すげえなひいじいちゃん。一気にバブリーだ。え、おとのさま？

コウタ （食い気味で積年の思いをぶちまけ）とにかくこれからは俺が小百合を幸せにするから！ いやほんとマジで！ 俺ずっと我慢してたんだ、

陽介 ずっと昔から小百合を幸せにできるの俺しかないって思ってた！
陽介には悪いけど、俺、小百合を泣かすような事絶対しないから！
そっか。

コウタ ごめん、見送りにきてそんな事。……それだけどうしても言いたかった。

コウタ、退場。

コウタの照明、消える。

陽介と小百合のみ。

小百合 ……。

陽介 よかったじゃねえか、あいつだったなら、今度こそは間違いないよ。

小百合 ……何、その言い方。今まで間違ってたみたいじゃん。

陽介 そういうわけじゃないけど。あいつは、ほら、ずっとお前のこと見守ってたんだからさ。俺たちが付き合い出す前からずっとだよ。だからある意味相当のアホだけど、ある意味、ようやく正解にたどり着いたんだよ。

小百合 ……。

陽介 なんだよ、なんか言えよ。

小百合 は。ずっと一緒にやっていると thought たんだけどな。

陽介 ……。

小百合 うまくいかないもんだね、人生って。

陽介 馬鹿。まだ酒が抜け切れてねえのか。

小百合 ねえ、一個だけ聞いていい？

陽介 なんだよ、また改まって。

小百合 一個だけ。

陽介 怖いんだよ、お前の【一個だけ聞いていい】は。

小百合 私と一緒にいて、楽しかった？

陽介 は？ 何言い出すんだよ、いきなり。

小百合 楽しかった？

陽介 ……。

小百合 (急に我に返って) いやいや、何言ってんだ私。ごめん、今の聞か

かったことにして、消去消去。コウタがいきなりワケわかんない事い
うからこっちまで調子くるっちゃったよ。ま、あの、いつまでも応

援してるから。陽介なら大丈夫だよ。

陽介 大丈夫って何がだよ。

小百合 だって陽介には才能あるから。うちらは続けることもできなかったけど、ずっと続けてるってことは、みんなに期待されてるんだよ。

陽介 ……――。

小百合 (遮って) 武道館でやることになったらほんと見に行くね。私たちが果たせなかった夢、陽介が絶対叶えてよ。

陽介 ……。

小百合 どうしたの？

陽介 (泣きそうになるのを堪えつつ) ……才能ってそもそもなんなんだよ、俺は取り返しのつかないもの取り返したくて、だけどこのままズルズルやっても全然先が見えなくて、けど辞める勇気もない、だって辞めたら俺に何もなくなっちゃうから。

陽介N なんて叫びたかったけど、それを言っちゃうと本当に自分が壊れちゃいそうで……、ただ黙って、小百合の言葉に頷いた。

小百合 私は好きだよ。陽介の曲。

陽介 ……。

小百合 誰がなんと言おうと、私は好きだから。陽介の作るもの。

陽介 ……。もしお前が今のやつと別れられて、コウタと結ばれることにならなったらさ真っ先に知らせろよ、その時にはとっておきの新曲作るから！ お前らの結婚式で俺歌って客席ダイブするよ。

小百合 ……。馬鹿。ありがと。

陽介N それから電車が来て、俺たちは笑顔でさよならをした。遠ざかっていく小百合、あいつはまたどこかのトイレにひきこもり声を殺して泣くのかな。その予想がハズレならむしろ、その方がいい。

電話の音。

陽介 あ、もしもし佐伯先輩、すいません、一旦お金借りれたんですけど、あの、追剥ぎにあいまして。出るんですよ追い剥ぎ、田舎だと。ただ、それと引き換えに、今すごい新曲浮かんじゃって、最高の失恋ラブソ

ングです、それ絶対ヒットさせますんで、それで借金返すつてのでどうでしようかね？

陽介の照明、ゆっくり落ちていく。

【未完成最高曲、おしまい】